

上総地域における軍荼利明王信仰

A Primitive Form of the Faith in Kundali in Kazusa Area

井上孝夫

Takao INOUE

[目次]

- 第1節 はじめに
 - 第2節 上総四軍荼利への視点
 - 第3節 鹿野山・神野寺の軍荼利明王信仰
 - 第4節 甘露寺の軍荼利堂
 - 第5節 水沼寺の軍荼利堂
 - 第6節 軍荼利山東浪見寺
 - 第7節 結語
- <文献>

第1節 はじめに

軍荼利明王信仰は同じ明王といっても、不動明王などと比べれば一般にはあまり知られることのない、特異なものである。グンダリとはもともとインドにおける<グンダ=水器>、<リ=止める>の意味で、その水器は不死の霊薬・甘露を入れるものとされる。ところが日本では軍荼利の文字が当てられることによって、戦争の神、荒らぶる神のイメージが定着していった。そして人々は未だに軍荼利明王に対しては、畏怖の念を抱いているのである。

軍荼利明王を祀る寺院としては空海ゆかりの東寺（教王護国寺、講堂に五大明王を安置）が有名であるが、関東周辺では高尾山薬王院（東京都）、高山不動（飯能市）、それに鹿野山神野寺（君津市）が代表的なところである。だが旧武蔵から甲斐にかけて軍荼利明王信仰は独自の信仰圏をもっていた痕跡が確認できるし、また鹿野山がある旧上総国においても上総四軍荼利と呼ばれる独自の信仰圏が存在していた。

今回この小論では、比較的はっきりとした信仰圏を形成し、その信仰が細々とではあるが現在にまで受け継がれている上総の軍荼利明王について、その信仰の実相を解明してみることにはしたい。

第2節 上総四軍荼利への視点

軍荼利明王は古代の日本においてインドから導入された。そして古代の後期、様々な明王信仰が展開していくなかで、五壇法や大威徳法がまとめられた。それらは、次のようなものである。

「院政政権の下では、愛染王法をはじめとして、さまざまの新奇な明王信仰が発達した。大威徳法も、その一つである。撰関時代以来盛んとなった五壇法では、不動明王を中心に、降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉の四明王を東・南・西・北に配置する。これら明王は、もともと別個に成立したのが、後になって五大明王（五大尊）というグループとして信仰されるようになったのである。」（速水、1987、139頁）

千葉県においては、940年（天慶3年）に平将門を調伏させるために朝廷の命を受けた寛朝が京都・遍照寺からやって来て成田山に不動明王信仰をもたらした。それによって不動明王信仰とともに軍荼利明王信仰も発展した、と捉えることもできるだろう。実際のところ、不動明王と軍荼利明王とは一体のものとして信仰されてい

た可能性もあり、成田山の不動明王に対して南方の守護者として鹿野山に軍荼利明王が位置づけられていた可能性もある。しかし大威徳法などの五大明王信仰では上総の軍荼利明王信仰は解けないのではないだろうか。その理由は、近辺に他の明王信仰が見当たらないこと、それに上総に四軍荼利を配置する理由がはっきりとしないこと、などである。

このことは成田不動中心の発想から、上総固有の信仰の解明へという発想の転換を促すものとなる。そこで個々の寺院の来歴を検討する作業が必要となるだろう。ここで取り上げる上総四軍荼利とは、鹿野山神野寺、甘露寺軍荼利堂（市原市大桶）、水沼寺軍荼利堂（長南町）、東浪見寺（一宮町）の4カ寺であり、その位置関係は [図1] のようになっている。

[図1] 上総四軍荼利概念図



以下では、この4カ寺の来歴を検討することによって、上総における軍荼利明王信仰の原初的形態を解き明かしていきたい。

第3節 鹿野山・神野寺の軍荼利明王信仰

鹿野山神野寺の軍荼利明王信仰は現在でも鹿野山信仰の中心的な位置を占めている。だが本尊の軍荼利明王像はほとんど秘仏化されており、毎年2月の節分の折りの正午と夕方6時の2回公開されるだけで、通常は宝物庫の七分の一に縮小された明王像を参拝することになる。この鹿野山は推古6年（598年）9月に聖徳太子が開山したという伝承がある。中興一二世・元利の筆になる『神野寺往事記』にその旨の記述があるが、到底信じがたいものである。また天安元年（857年）2月に慈覚大師が来山したとの伝承もあるが、これも極めて疑わしい。おそらくこの伝承は、慈覚大師に関係する天台宗派による神野寺再興の事情を語り伝えるものではないかと思われる。さらに平安時代末期から鎌倉時代の初期にかけて熊野信仰がもたらされたともいうのだが、このあたりの伝承は史実を語り伝えているものだろう。

ということで神野寺の創建事情ははっきりとはしない。そこで本尊・軍荼利明王の由来を手がかりに神野寺の

由来を考えてみよう。神野寺の本尊はもともと軍荼利明王のほかに、釈迦、薬師、観音を祀っていたが、現在に受け継がれているのは釈迦と軍荼利であり、信仰の中心に位置するのは軍荼利明王である。この軍荼利明王について、『房総志料』（宝暦11年=1761年）はヤマトタケルであるといい、『房総志料続篇』（天保3年=1832年）はアクル王（悪楼王）だという。確かに鹿野山の一峰に白鳥峰があり、そこにはヤマトタケルが祀られている。また鹿野山に隣接する鬼泪山は<ヤマトタケルに追われたアクル王が涙を流して哀れみを乞うたところに由来する>という伝承に基づく命名であり、<血草川は悪鬼の血で染まった>という。しかしこれらの伝承は天台、熊野信仰の流れが濃厚であり、軍荼利明王の真の由来には言及されてはいないように思われる。

鹿野山の軍荼利明王の姿は何よりも手足に蛇をまとう姿に特徴がある。このことは軍荼利明王が蛇神だということを示している。民俗学の通説では蛇や龍は水にかかわるとされ、農耕民族の信仰だとみなされることが多い。しかし蛇神の信仰は弥生時代から存在し、単に農耕のみならず、漁労や製鉄などともかかわっていたはずである。そして古代において、この蛇神の信仰を広めたのは修験道勢力であった。彼らにとって、蛇の細長いその姿は永遠性の象徴であり、その永遠性は無限の生命をもつ金属に顕在化する。だから修験者にとって蛇とは、まず何よりも金属を象徴するものであった。鹿野山と蛇神とのかかわりについては、旧清和村長久寺に伝わる<鹿野山の大蛇に娘を奪われた長者を沢蟹が助けた>という伝説に示されている（『清和村誌』1976年）。ここで鹿野山の大蛇を象徴しているのは蛇神を信仰する修験者のことだろう。それに対して、長者の娘を救う沢蟹とは大蛇の渡来以前に鹿野山に住み着いていた先住の製鉄民族である。ここで蟹とは<鍛冶>を表現するものである。だから鹿野山を最初に信仰していたのは蟹におとしめられた製鉄民であり、蛇神は彼らを支配した後続の製鉄民すなわち天台系の修験道勢力だっただろう。

鹿野山の軍荼利明王が蛇神に深くかかわるものだとすれば、それは修験道のなかでも特に金属信仰と関連するナーガの思想を象徴するものだろう。その修験道勢力をここではひとまず、慈覚大師と関係をもつ天台系と捉えておくことにしたい。

第4節 甘露寺の軍荼利堂

市原市の大桶地区（旧大桶村）は戸数60ばかりの集落で、千葉県の典型的な農村地域である。この大桶地区の甘露寺（無住）の裏山にひっそりと軍荼利堂が祀られている。甘露寺の甘露は軍荼利明王の飲み物であるから、甘露寺も軍荼利堂も宗教思想のうえで密接に結びついていることは明らかである。ただしこの2つの寺院の創建の事情については全く不明である。そこで大桶地区の方々から軍荼利明王に関して聞き取りを行ない、次のようなことがわかった。

[1] 軍荼利明王はもともと猫山に祀られていた。その当時は北向きだったと伝えられている。ヤマトタケルが勧請したという伝説がある。

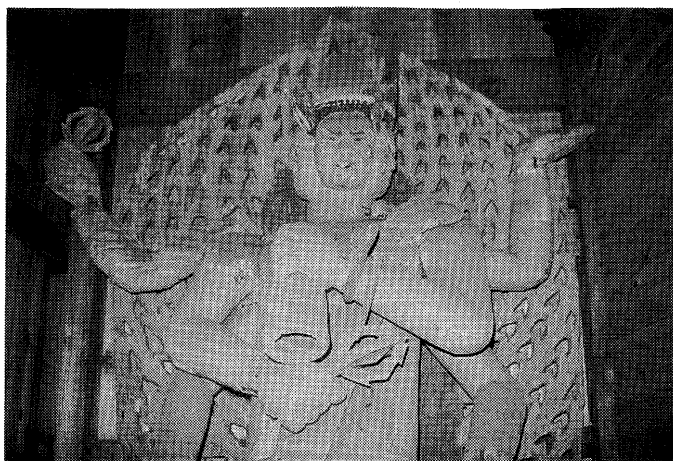
[2] 軍荼利堂は現在は甘露寺の奥の院という位置づけになっている。毎年1月27日にカガリダキを行なっている。カガリダキとは、<飾り焚き>のことではないかと考えている。

[3] 大桶集落には虚空蔵菩薩が祀られていた。所在地は乳清水の堰のうえの山である。天台宗で慈覚大師の創建だといわれる。毎年正月と9月13日に護摩が焚かれる。ところが昭和13年（1938年）の正月に、護摩の残り火がもとで消失してしまった。

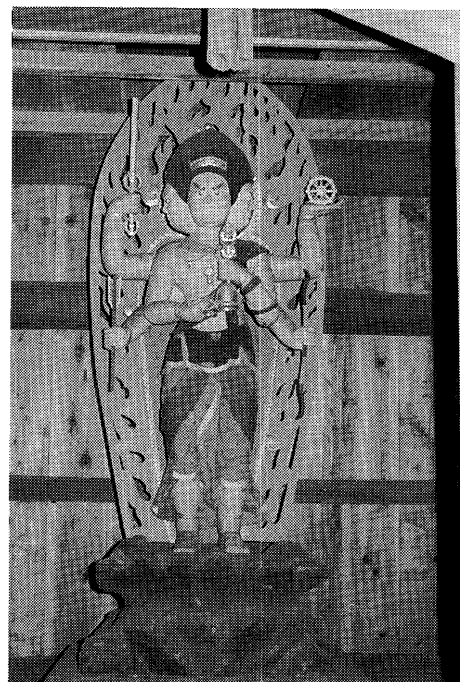
[4] 大桶の集落には毎月8日に「八日講」がある。男性は25、26歳になるまでに出羽三山に一度は行っておかないと、死んだときに行人（出羽三山の山伏）に拜んでもらえないといわれ、皆出羽三山に行った。

[5]（近辺に製鉄遺跡はありませんか、の問いに対して）源氏山ゴルフクラブの土地は大桶・武士の集落の人たちが所有していた。この場所には石尊様などの石碑があったが、土地を売却したときに、集落のお宮に移した。このゴルフ場の敷地にはカナクソと呼ばれる5、6反歩の土地がある。ここは赤い土で、砂地だった。付近には水田もあったが、あまり山水は出ていなかった。

[6] 軍荼利堂に安置されている軍荼利明王像は前のものは8尺あまりの寄木造り、新しいものは昭和51年7月8日につくられた。新しい像の彫刻者は東京都台東区寿町の木村鶴光氏である。



市原市大桶の甘露寺・軍荼利堂の軍荼利明王像
(寄木造の旧像で、傷みが激しい)



同じく甘露寺の軍荼利明王像
(新像)

ここの軍荼利明王も鹿野山の場合と同様、蛇をまとった姿である（左第二番目の手）。だが東寺の軍荼利明王像や鹿野山の軍荼利明王像ほどの迫力には乏しく、全く独自の姿を示している。そしてその来歴についても、はっきりとした伝承は残されてはいない。だが、ヤマトタケル、虚空蔵菩薩、カナクソ地名などは製鉄信仰とのかかわりをうかがわせるものとなっている。なかでも、軍荼利明王がもともとは猫山に祀られていた、というのは貴重な証言である。この猫山について、『市原郡誌』（1916年）は次のように記述している。

「大桶区にあり、之を古老に問うに今より凡そ二百年前の頃、東は廳南伊勢屋の猫、西は相川村新左衛門の猫を始めとして、数百の猫集りて盛宴を張ることあり、秋夜月清く蟲唧く頃、その歌舞の状を目撃することありしと、今は此の山の周囲青年団の為に伐採されて開墾する所となり、山頂の平地に四・五の老椎を存するに過ぎず。」

ここでは猫山の由来は文字どおり、猫にかかわるものとして語られている。しかし「ネコ」にかかわる山はこの猫山だけでなく、信州菅平高原の北方の根子岳や会津の猫魔山など、全国各地に存在する。それゆえ、「ネコ」には何か特別な意味が隠されているのではないかと検討してみる余地がある。この点について、最も明快なのは沢史生（1977, 298頁）の「ネコ＝寝る粉＝鉄穴流して沈澱する砂鉄」という説である。同様の考え方は、若尾五雄（1994）や内藤正敏（1994）も指摘するところであり、特に内藤は岩手県遠野市郊外の農家で使われていた「ネコ」の実物を写真撮影している。

このようにみていくと、ネコが砂鉄を意味する特殊な用語だったということはもはや疑う余地はないだろう。それゆえ猫山に祀られる軍荼利明王というのは製鉄信仰にかかわる可能性がここでも濃厚なものとなるのである。

また虚空蔵も製鉄とかかわることは、若尾（1985）によってすでに指摘されているところである。大桶集落の場合、住民の信仰が厚いのは軍荼利明王よりもこの虚空蔵菩薩の方であり、集落の宗教に関する話題には必ず登場する。この虚空蔵菩薩には乳清水の伝説があり、産後乳の出が悪かった婦人の願いに虚空像菩薩は「甘露のとき味のする清水があり、その清水を飲めば乳が出る」とのお告げをし、実際に清水を飲むと乳が出るようになったという（『市原郡誌』）。ではこの虚空蔵と軍荼利明王とはどのようにかわるのだろうか。この乳清水の伝説では、虚空蔵菩薩と清水の甘露なる味わいとのかわりが示されており、虚空蔵・甘露・軍荼利明王という連想が成り立つ。だが虚空蔵と軍荼利明王との関係はより直接的なものであった。『密教大辞典』（法蔵館、1931年）の「軍荼利明王」の項目をみると、「仁王念誦儀軌」には「軍荼利明王は虚空蔵の所変とす」という記述があり、虚空蔵菩薩変じて軍荼利明王になるというわけである。おそらくこの大桶の軍荼利明王もそのような宗教思想に

基づいて祀られたものだろう。つまり、軍荼利明王とはもともと虚空蔵であり、その深層において両者は製鉄信仰につながるものなのである。

大桶地区の甘露寺・軍荼利明王・虚空蔵菩薩はいずれも製鉄と関連する。そしてその証しとして、軍荼利堂のヤマトタケル開山伝承、猫山地名、カナクソの遺物が残されているわけである。ではその信仰の主体は誰だったのか。虚空蔵堂の慈覚大師開山伝承からみて、それは天台宗だった可能性が高いということはあるだろう。

第5節 水沼寺の軍荼利堂

この市原市大桶の軍荼利堂から南南東へ10キロばかりのところに、長南町水沼寺の軍荼利堂がある。この寺の正式名称は軍荼利山明王院水沼寺というもので、軍荼利明王と深いかわりをうかがわせる。『長南町史』（1973年）によれば、水沼寺は永禄2年（1559年）3月に創建され、承応元年（1652年）12月までは甘露寺と号していた。軍荼利堂はもともと野見金山（80メートル）の山頂に祀られており、本尊は行基の作と伝えられている。なお野見金山とは、山頂からの眺望が上総、安房、武蔵、相模、駿河、甲斐、上野の七カ国に及ぶことから能見ヶ峰山だというのが、ノミ（鑿）とカネ（金）の合成で製鉄関連地名である可能性もある。

この水沼寺は現在、柴田憲暢氏によって守られている。柴田氏はすでに90歳を超えているが、自給自足の一人暮らしで、いまなおカクシャクとしている。その柴田氏に水沼寺に來たいきさつや、軍荼利明王の解釈をめぐって貴重な話を聞くことができた。以下はその要約である。

[1] 柴田氏と水沼寺とのかわり

奥羽山中に生まれ、上京して納豆売りをやりながら、神田錦町の正則英語学校に通った。在校中に失恋を経験し、それがきっかけで、納豆売りの知人を通じて千葉県長生郡陸沢町の歎喜寺で修行することになった。その後、太平洋戦争中にモンゴルに渡った。僧侶ということもあって、他の日本人とは違って現地の人たちと親密な交流ができた。モンゴル名はナランバクシという。だが捕虜収容所の管理の仕事をやっていたために、戦後は、戦犯としての摘発を逃れるため、九州、四国の巡礼団のなかに身を隠した。そして戦後10年ほどして、水沼寺にやってきた。この寺の先代が歎喜寺の徒弟だった関係で、寺の再建の仕事が自分のところに回ってきたのである。

[2] 軍荼利明王の由来

水沼寺にやってきたとき、軍荼利堂は傾き、村人によって解体される寸前のところだった。それを何とか思い止まらせて、一晩を過ごした。すると傾いていた軍荼利堂はもとの位置に戻ったのである。これを機に荒廃した堂宇を再建することにした。

軍荼利明王は荒ぶる神であり、決して粗末に扱ってはならない。私は村人から軍荼利明王を守った。以来、本尊はだれにもみせないようにしている。

軍荼利堂を再建した折り、明王像のなかから、元禄7年（1694年）に江戸森田町（蔵前）で60日間、この明王像を御開帳した旨の記述がみついている。軍荼利明王の由来については、次のように考えている。壬申の乱で敗れた天智天皇の航海士の蘇我が近江から千葉へ上陸した。そこが千葉市の蘇我であり、彼らは市原市周辺に白鳥神社を祀り、鹿野山九十九谷に隠れた。彼らの守り本尊が軍荼利明王である。

以上が柴田氏の話の概要である。正直に言って、どこまでが本当の話なのかは判断がつかない。しかし話の本筋からすれば、ここの軍荼利明王は江戸時代の初頭につくられた、ということではないのだろうか。だが軍荼利明王の由来に関する柴田氏の個人的な見解は、明王に対する信仰が古代にまで遡るということを示している。いずれの考えが妥当なのかははっきりとしないが、軍荼利明王信仰が天台宗とかわることは明らかである。

そもそもこの長南町は上総における天台の中心地といわれ、延暦17年（798年）の創建とされる町内の長福寿寺は房総三国における天台宗寺院308カ寺の中心としての位置を占めている。また野見金山には製鉄ゆかりのヤマトタケル伝説が残り（『長南町史』76頁）、製鉄との関係からこの山名が原初的には<鑿・金>だったことをうかがわせる。またこの野見金山のある岩撫地区には<十三塚>の地名が残るが、それは明らかに天台宗にお

ける<十三壇信仰>によるものである。このように長南町側からみれば、野見金山の軍荼利明王は天台密教とのかかわりが深い。

だがこの野見金山は長南町と市原市の境界をなす山であり、<ノミ・カネ>の由来については、市原市側からも検討しておく必要があるだろう。野見金山の市原市側は旧市原郡平三村であり、この村は土地の土豪で西願寺という寺を開いた土屋平蔵という人物の領地だったという。この平蔵は野見金山に金と朱を埋めたといい、「朝日照る夕日かがやくそのもとに黄金千瓶朱千瓶」という歌が伝えられている。また野見金山の山頂には切ることのできない<鬼石>があり、山畔にはヤマトタケルゆかりの<のみがねの井>がある（以上、藤沢、1917、285-286頁）。

これらの伝説はいずれも製鉄とのかかわりを示すものとして興味深い。まず「朝日夕日」の伝説は製鉄伝承として典型的なものであり、黄金と朱（水銀）は仏像の金メッキに欠かすことのできないものである。土屋平蔵は黄金と朱を取引できるような長者だったのだろうか。また<鬼石>の由来も、製鉄民としての鬼とのかかわりを示唆しているものとも受け取ることができる。さらにヤマトタケルがこの地を訪れた際に飲んだという<のみがねの井>の由来も、鉱脈を探查するときの穴掘りの副産物だったにちがいない。

このようにみていくと、野見金山の由来に関しては土屋平蔵という人物とのかかわりが強いのではないかと思われる。水沼寺の軍荼利明王ももとはこの山に安置されていたものだから、水沼寺に安置される以前に野見金山とかかわっていたものとまずは考えなければならない。そうだとすると、軍荼利明王はこの土屋平蔵、あるいは平蔵に代表される製鉄民の信仰対象だったのではないだろうか。

第6節 軍荼利山東浪見寺

最後に取り上げる軍荼利山東浪見寺は軍荼利明王信仰に関しては、鹿野山と並んで比較的良好に知られている存在である。とはいっても信仰の最盛期は江戸時代であり、九十九里浜の地引き網漁の隆盛とともに漁師の信仰が厚くなり、江戸や三浦半島、さらには奥州にまで信仰圏が広がったといわれる。

本尊・軍荼利明王像は平安時代の作、ヒノキの一木造りで高さは2メートル4センチ、県の重要文化財に指定されている（千葉県教育委員会『房総の仏像彫刻』1993年）。ただしその原形はかなり損なわれており、左右二本の手しか残っていない。原形は一面八臂で、片足を上げて蛇を踏んでいる姿だったと推定されている。東浪見寺は聖徳太子諸願の寺であり、軍荼利明王像も太子の作で、のち行基が大同年間（806-809年）に再刻したといわれている。

この明王に関して、太平洋戦争後まもなくの頃より東浪見寺を守り続けている倉岡慈田氏に話を聞く機会を得た。

「軍荼利明王像は行基の作といわれているが、常識的に考えて、信じがたい。要するに行基の弟子によるものということでしょう。東浪見寺にはヤマトタケルの伝説はない。ただしこの寺が密教や修験道とかかわる、ということは十分にあり得る話です。上総四軍荼利といって、鹿野山、甘露寺、水沼寺、東浪見寺の四カ寺に軍荼利明王が祀られている。私はこの順に上総に軍荼利明王信仰が波及していったのではないかと考えています。」
本尊・軍荼利明王像は傷みが激しく現在修理中、また江戸時代につくられた立派な明王像は近年本堂に安置しておいたものが盗まれてしまった、とのことである。

ではこの東浪見寺というのはどのような寺なのだろうか。ここでは東浪見の地名由来と、一宮町の南宮神社とのかかわりから、東浪見寺の来歴を考えてみることにしたい。

まず東浪見の地名由来だが、『房総志料』では泥海（ドロウミ）の転訛とされ、その説が有力視されている。しかし『一宮町史』（1964年）には、旧東浪見村矢畑の<トロメキ>地名がトロミ・トラミになった、という説が紹介されている。この<トロメキ>地名はトロトロと水が流れている様子からきていい、近くには<道メキ>地名もあって、こちらは軍荼利山中から滔々と水が流れる音を形容したものだという。要するに、トラミはトロミであり、トロミはトロトロだというのであるが、筆者にすれば、トロトロはさらにタラタラ、タララにつうじる、と考える。その根拠は次のようなものである。1992年の春、筆者は山口県豊浦町の<多田良>地区を調査し

た。このタタラ地名は山陰の小串海岸から砂鉄を採って来てたたら吹きをやっていたことに由来し、ここからは今でも畑を掘るとカナクソが出てくる。しかし伝承では<タラタラ>という水音がタタラになったとされ、製鉄のことなど全く忘れられている。この事例から推測して、タラータラタラートロトロートロミートラミという転訛の道筋は十分に成り立つのであり、ここではひとまず東浪見の地名由来をタタラに求めておこう。なお、東浪見の高原谷は高藤山の東南に位置する谷であるが、『一宮町史』によれば、高原はタララ（タタラ）の転訛だといいい、谷からは鉄滓が出て、かつて「刀工が住んでいた」との伝承が残されている。いずれにせよ、東浪見は製鉄にかかわる場所だったということだろう。

次に、東浪見と南宮神社とのかかわりである。林寿祐（林天然）の『長生郷土漫録』（1953年）によれば、東浪見村にはもともと村社はなく、村民は八種村（現一宮町）宮原の南宮神社の氏子だったという。そして祭礼の際には宮原、金田、信友の3村の氏子とともに南宮神社に参拝し、神輿を釣ヶ崎まで渡御したという。

この南宮神社というのは白鳳年間（672-685年）に美濃の穂積氏の金田郷移住とともに勧請されたものであり、祭神は金山彦（製鉄神）である。このことから明らかなように、南宮神社は製鉄ゆかりの神社である。現在でも、砂地のうえに建つこの神社の境内は黒々とした浜砂鉄に覆われている。穂積氏がどのような経緯でこの地に移住したかはわからないが、移住の目的の一つに新たな砂鉄の生産地を求めたことがあるのは間違いないところだろう。その穂積氏にとって最大の砂鉄生産地が釣ヶ崎だったのである（釣ヶ崎では近年まで砂鉄の採取が行なわれていた）。だから南宮神社から釣ヶ崎への神輿の渡御という祭礼は、この地に移住した彼らの原初の姿を再現するものとみてよいだろう。東浪見はこの南宮神社と釣ヶ崎の中間に位置しており、やはり何らかの祭祀の対象だったのではないだろうか。あるいは穂積氏の配下の人々の居住地だったのかもしれない。いずれにしても、東浪見村と南宮神社との関係は穂積氏の製鉄と結びついていたにちがいないのである。

ということでここでも、軍荼利明王信仰は製鉄絡みだった可能性が高い。そして明王像が蛇を踏みつける姿をしていたというのであれば、それは先住の製鉄民を支配した天台系の信仰を示すものだったといえるのではないだろうか。

第7節 結語

上総における4つの寺院の軍荼利明王像の由来について、はっきりとしたことはわからないが、寺伝や周辺地域の遺跡、地名などから検討すると、いずれも製鉄に絡むものとみてよいだろう。この点については、[表1]のようにまとめておくことにしたい。

[表1] 上総四軍荼利に関する基礎データ

所在地	関連人物	ヤマトタケル伝説	製鉄関連事項
神野寺 (年1回公開)	聖徳太子, 慈覚大師	あり (白鳥の峰)	遺跡, 鬼伝説 (鬼泪山) カノウ山=金生山
甘露寺 (公開)	(慈覚大師)	あり	カナクソ, 猫山地名 虚空蔵菩薩と関連
水沼寺 (非公開)	行基 (土屋平蔵)	あり (のみがねの井)	野見金山, 鬼石, 朝日 夕日伝説
東浪見寺 (年1回公開)	聖徳太子, 行基	なし	遺跡, タタラ→トラミ 釣ヶ崎砂鉄鉱山

[表1] から示唆されることは、まず何よりも上総四軍荼利が天台宗とかかわっているということである。これは古代における上総が東国における仏教支配の拠点だったことに関係している。そして上総近辺における、長生、長南、長者、長柄、・・・といった<長>の付く地名はいずれも<ナーガ>で、天台系修験道における蛇神を示すものだっただろう。この蛇神はその根源において製鉄神なのであり、蛇をまとめてそれを体現しているの

が軍荼利明王像であって、この両者は天台宗において統一されている。つまり、なぜ軍荼利明王なのか、といえ
ば、製鉄神である蛇神を象徴するために蛇をまとった軍荼利明王が選ばれたということなのだろう。だから原初
において存在していたのは製鉄における蛇神信仰であり、軍荼利明王はその信仰を表現するために選ばれたもの
に過ぎないのである。

おそらく天台系修験道は上総において、半島の西と東に軍荼利明王を祀り、先住製鉄民の霊を鎮めるとともに、
外敵からの守護神としていたのではないだろうか。その点で、両寺院においては、軍荼利明王と製鉄とのかかわ
りは重要ではあるが、幾分副次的なものだったもののように思われる。これに対して、甘露寺と水沼寺の軍荼利
明王像はやや異質である。甘露寺の場合、軍荼利明王は虚空蔵菩薩の所変として、直接的に製鉄と結びついてい
る。また水沼寺の場合、軍荼利明王像そのものがどのような姿をしているのか、未公開のために全くわからない
が、野見金山と土屋平蔵の伝説などから判断すれば、これまた製鉄と結びついているように思われる。このよう
に内陸部に位置する両寺院の軍荼利明王信仰は製鉄信仰と直接的に結びついているのである。

このように、上総における軍荼利明王信仰の背後にはこの地域における天台系修験道の製鉄にかかわる活動が
あったように思われる。しかしこれら4つの軍荼利明王信仰にはそれぞれ独自の由来があり、一括して扱うこと
には慎重でなければならない。特に、甘露寺と水沼寺の軍荼利明王信仰の起源については、中世ないし近世以降
のものである可能性が高く、古代にまで遡ることのできる神野寺や東浪見寺の軍荼利明王信仰とは信仰の起源は
異なっているのではないだろうか。これら4つの寺院が上総四軍荼利として信仰されるようになったのは、近世
以降における軍荼利明王信仰の高揚があつてのことだろう。

とはいえ、現在では上総四軍荼利について、千葉県の郷土史や伝説関係の文献でもほとんど取り上げられてお
らず、この地域における軍荼利明王信仰は知る人ぞ知るような存在である。だが今回は、何よりも軍荼利明王と
いう特異な信仰対象に引き付けられるかたちで、比較的短い期間で現地調査を実施することができた。貴重な資
料を提供して頂いた方々に感謝の意を表して結びとしたい。

<文献>

- 藤沢衛彦, 1917, 『日本伝説叢書・上総の巻』日本伝説叢書刊行会。
速水 侑, 1987, 『呪術宗教の世界』塙新書。
井上孝夫, 1994, 「房総地域の山岳宗教に関する基礎的考察」『千葉大学教育学部紀要』42。
上総一宮郷土史研究会, 1981, 『ふるさと』。
内藤正敏, 1994, 『遠野物語の原風景』ちくま文庫。
岡野捷郎, 1979, 『鹿野山と山岳信仰』崙書房。
沢 史生, 1977, 『ゆのくに伊豆物語』国書刊行会。
若尾五雄, 1985, 『金属・鬼・人柱その他』堺屋図書。
若尾五雄, 1994, 『黄金と百足』人文書院。